令和７年度山形県農業普及活動外部評価結果について

１　普及指導活動の体制について（組織・人員体制、普及指導員の資質向上の取組み等）

①評価点

・プロジェクト方式による普及活動が分かりやすくてよい。
・地域のニーズや、異常気象に対する課題など適正に対応できている。
・各普及課で地域に合った課題に取り組んでいて良い
・農業が直面する課題（異常気象、担い手不足等）を正面からとらえるとともに、山形県農業の基本的方針や戦略に沿った形で課題を遂行する体制が整っている。
・生産現場に密着した普及活動がなされている。
・前任者の支援活動が後任者に引き継がれ、息の長い活動になっている。
・各プロジェクトの過去からの積み重ねから、つや姫ブランドの確立や果樹王国につながっていることが感じることができた。
・農業者個人もしくは農業法人単体ではなかなか自園地のことで手一杯になってしまうところ、国、もしくは自治体が組織的に課題設定、解決への取り組みを行っていくことは意義の大きいことである。

②提案・意見

・多品目の野菜類についても、早急に高温対策マニュアルを完成させてもらいたい。
・各普及課での取り組み内容を県内の農業者が閲覧できる仕組みが欲しい。
・庄内のメロンのつる枯れ病の蔓延防止や接ぎ木技術の確立、対策技術の普及の取り組みを支援してほしい
・いずれの課題も最終的な目的は農業者の所得向上である点を踏まえると、流通（販売価格）まで踏み込んだ普及活動が今後はますます期待される。JA の営業力や卸売市場の規格についても可能な限り関わり、農家所得を引き上げていく機運を造成することが期待される。
・枝豆であれば、食味のよさをいかに販売価格に反映させるか、りんどうであれば、厳しい規格の厳守を産地の強みとする一方で、多様な販売方法を模索するなどである。
・産地として維持していくためには、若手や大規模経営者だけでなく、定年就農、小規模の家族経営も含めた支援が必要である。部会の承継、若手とシニアの交流などをとおして、生涯現役で農業ができる地域づくりを進めてほしい。
・現場レベルでは多彩で多様な工夫が行われている。難しい課題がいくつもある中で、何をイシュー（問題・課題・論点）として、優先していくものはどれなのか、方針を決める部分でボトムアップの現場の実感が反映される仕組みがあるとよい。

③意見を受けての改善点
・ R5 に作物ごとに作成した高温少雨対策マニュアルを補完する高温対策事例集を作成している。主要品目に加え、多様な野菜の品目でも高温対策に関する優良事例を共有できるよう取り組んでいく。 ・各普及課で成果の上がった普及指導計画の成果を事例集として取りまとめている。この成果事例集をやまがたアグリネットで閲覧できるようにし、普及指導活動の周知を図っていく。 ・庄内地域ではメロンつる割れ病による被害がみられ、被害状況の把握と対策が急務となっている。防除対策が確立されていない病害であるが、令和５年度から普及指導計画に位置付け、被害状況の把握と防除対策の実証等に取り組んでいる。研修会等での情報提供や実証圃の結果に基づく対策技術の検討を通して、産地全体での対策構築をさらに進めていく。 ・地域農業の課題解決のため、プロジェクトチームを編成してチームで普及指導活動にあたっているものも多い。行政機関や試験研究機関、農業協同組合に加えて、食品事業者や食費者等、多様な関係者と連携し、普及指導員がコーディネート役として多様な販売方法の検討にも取り組んでいく。 ・経営規模の大小を問わず、生産性・収益の向上、技術力向上に積極的に取り組む農業者に対して、農協の営農指導員や先進的な農業者とも連携して産地全体で支援できる体制づくりを進めていく。また、ベテラン農業者と若手農業者が交流を通じて、ベテラン農業者がこれまで培ってきた技術を継承する機会も設けていく。 ・地域農業の様々な課題がある中で、普及指導員自らが、現状や必要性などの実態把握、解決すべき課題の整理を行い、普及指導計画を策定している。計画策定の際には、県が進める農業施策との整合性も取りながら、現場の実態把握と課題の整理を前提に、普及指導活動の方針を決定していくよう、普及課単位で十分な検討・共有を行っていく。

２　普及指導計画について

【評価】Ａ：優れている　Ｂ：妥当である　Ｃ：見直しが必要

（１）気候変動に対応した米の高品質安定生産の推進　【Ａ：５名、Ｂ：１名】

①評価点

・迅速な情報発信に SNS を用いている点が、発信者の負担軽減になっている。
・高温対策としての追肥の実施やきめ細やかな現地指導等積極的な対策の成果が出ている。
・行政や JA との連携がしっかりしているため高温で早まる収穫に合わせた対応ができている。生産者の米作りにとって良い環境になっている。
・土づくりを重点項目として絞っているのは、生産者には届きやすい。高温対策マニュアルの SNS による浸透やつや姫マイスターという地域をリードする仕組み作りも面でブランドを作る上で効果的である。
・気候変動については、喫緊の課題であり、現場レベルでの対策を講じていくという取組みは意義の大きい。
・単一の対策にとどまらない、きめ細かな支援、現場に寄り添った対応をしている。

②提案・意見

・高温対策、ICT 技術、SNS 発信はこれから必要不可欠であり、この先も続けてほしい。
・減数分裂期追肥の食味への影響をどう抑えていくか、今後に期待する。
・ ICT をもっと広く取りいれる活動をお願いする。

③意見を受けての改善点

・次年度も、「気候変動に対応した栽培技術の実践」を重要な指導事項と位置付け、SNS(LINE)を活用した迅速な情報提供を強化するとともに、「高温少雨対策マニュアル」の技術導入を図りながら、気候変動（高温）に強い稲づくりの啓発指導を行っていく。
・減数分裂期追肥については、今回得られた知見をもとに、懸念される食味への影響を整理し、高温下において安定生産に資する対策技術の１つとして活動手段に取り入れていく。
・農業情報システム「やまがた米づくりナビ」については、従来の啓発活動に加え、他地域での先行事例をもとにした活用場面の提案を行いながら、関係機関と協力し、普及推進に取り組んでいく。

（２）「ハッピー」えだまめブランド産地の飛躍に向けて！　　【Ａ：４名、Ｂ：２名】

①評価点

・西村山地域では、枝豆が野菜品目の生産額１位で、対策技術が枝豆の安定生産に貢献している。広域でこのプロジェクトの恩恵を享受できている。
・晩生種で 9 月の出荷ができる産地は西村山地域しかなく、ブランドが確立されている。ブランド産地を維持する重要な課題設定である
・生産者が減少する中で面積維持は、ブランド産地の意識、取組みの積み重ねである。
・灌水導入を６％から 33%に引き上げたのは大きな成果である
・“秘伝”をはじめとしたえだまめは、県内では高い人気があり、より高品質で効率的な生産を支援していく取組みは意義が大きい。
・高収量化、新品種の試作など、技術がどんどん進化しており、それを主導していることは大きな意味がある。生産者数減少の歯止めになることを期待する。

②提案・意見

・灌水・追肥による効果は見られるが、全体の販売数量が伸びていない。異常な夏の高温はこれからも続くと考えられるので、生産者への周知が課題。
・秘伝に関しては灌水や追肥の成果は出ているものの、枝豆全体の販売数量の伸びに反映されていないのが惜しい。継続した支援が必要である。
・ハッピーえだまめをさらに広め、特産品としてさらに押し出していくために市場などに PR 等の支援ができるとよい。
・急激な生産者数減少に対してどうアプローチしていくかの検討も必要になる。

③意見を受けての改善点

・山形枝豆日本一産地化 PJ で県産えだまめのブランド力強化のため、食味分析結果を基に栽培改善につなげる取組みを、消費者・実需者（市場関係者等）に PR している。トップセールス等と連携して食味の良さをアピールし販売価格に反映できるよう、食味成分分析と栽培管理アンケート調査による食味向上の取組みを継続する。
・これまでの栽培講習会、圃場巡回講習会、栽培だよりに加えて、JA の集荷場での掲示、SNS やホームページの活用、部会役員への呼びかけ依頼などで、灌水と追肥の成果を周知する。また、普及員及び JA 担当者の個別指導を増やすし、さらに多くの生産者への着実な技術導入を図る。
・日頃の普及活動のなかで、部会や JA とも連携を図りながら、栽培管理、収穫選別作業において、高性能の選別機を組み入れた省力的で効率的な作業体系を確立し、１戸当たりの栽培面積の拡大について検討していく。

（３）気候変動に対応した北村山産米の高品位安定生産の推進　【Ａ：６名】

①評価点

・中間山地の特色や問題をとらえた米作りに対する支援であり、立地特性を踏まえた支援は高く評価できる。斑点米カメムシ類に対して重点的に対策・指導行った結果、被害の減少につながっている。
・村山では土づくりに重点をおき、北村山では中山間地の防除対策に絞っている。農業者に異常気象下で全ての対策を啓蒙してすべてが実践できるわけでないことを考えると、一つ一つ技術を定着させていくことは効果的である。
・周知対策の徹底で部分着色粒の落等が半減できたことは素晴らしい成果である。

②提案・意見

・中山間地域における病害虫の対策は継続的な耕作に必要な技術である。これが解決されないと、離農や後継者不足に繋がる恐れがある。
・斑点米の被害が減っているが、色彩選別機の導入状況による変化も聞き取り調査を行って欲しい。

③意見を受けての改善点

・生産者の病害虫発生の不安が解消されるよう、引き続き、いもち病、斑点米カメムシ類、ばか苗病等の対策について、こまめに情報提供を行いながら、指導の徹底を図っていく。
・色彩選別機の導入状況の聞き取りを進めるとともに更なる活用を促し、品質向上に向けた取り組みを継続していく。

（４）販売力と運営力強化による産地直売所の発展　【Ａ：６名】

①評価点

・目玉商品作り、売り場の工夫、SNS の活用の他に生産者の研修など多方面からのアプローチが成果につながっている。
・直売所は、店と農業者のつながりが重要である。ぐるみ型で若手を役員にして役員のまとまりという強みをさらに伸ばしている点が評価できる。
・素晴らしいものがあっても、知られていないと意味がない。広報や SNS の活用で直売所の周知に取り組んでいることは有効である。

②提案・意見

・会員数も増えているが地域外の生産者が入ってきたらどうするのか。３年後を見据えた事業計画に期待したい。
・熱量を持ち産直の頑張りを支援している。他の直売所への良い影響も期待する。

・ポップと SNS を組み合わせて“バズらせる”という手法も検討できるのではないか。

③意見を受けての改善点

・直売所の法人化に向けた活動支援の中で、地域外の会員確保についても検討を進めていく。
・次期普及指導計画では、本対象組織をビジネスモデルとして、他産直の運営力強化に重点的に取り組んでいく。
・産直の目玉商品・品目について、広報・POP・SNS を活用しターゲットに届く効果的な PR を実施できるよう支援していく。

（５）りんどうの新産地づくり　【Ａ：５名、Ｂ：１名】

①評価点

・新産地づくり、新規栽培者掘りおこしなどは、これから農業を始める方にとってもよい取組みである。
・冷涼な中山間地域の地の利をいかしたりんどうの産地化に生産者に寄り添い支援している。
・遮光資材を使った高温対策で被害を減らし、販売額の増加につながっている。新規栽培者や栽培面積も増加するなど、支援の成果が出ている
・毎年の栽培講習会の継続で防除対策や遮光材の有効性を周知していく地道な活動が産地づくりにつながっている。

②提案・意見

・高温に対する技術の普及をしてもなお、前例のない高温により、秀品率が目標達成できなかったという点は、いかに天候への対応が難しいかを感じた。逆転の発想でぜひ「ハチマキりんどう」をブランド化していただきたい。
・恒常化している高温への対策が気になるところ。遮光資材の活用で十分対策できる範囲に収まるのか、継続してみていく必要がある。

③意見を受けての改善点

・３月開催した置賜地域りんどう産地強化 PJ チーム会議でも、あらためて「ハチマキりんどう」の市場評価を確認していくことになった。令和８年度から新規で始まるりんどうの普及指導計画でも出荷本数の増加に向けて、規格の検討について取り組んでいく。
・令和８年度の普及指導計画でも生産者と連携し、引き続き遮光資材の実証圃を設置する予定である。より効果的な遮光技術の方法について、年次変動を考慮のうえ、現地への普及をすすめたい。

（６）消費者ニーズに対応した商品開発・販売力強化と担い手の育成支援

【Ａ：４名、Ｂ：２名】

①評価点
・共同加工施設整備の予定がある中で、加工への第一歩を踏み出す人に向けたよい取組みである。 ・農産加工業者が高齢化に伴い減少する中、消費者ニーズに対応した支援や、新規事業者の掘り起こしなど必要な支援を行っている。 ・すでに起業している事業者、新規事業を目指す志向者等、ステージに応じた支援を行い全体的なスキルアップや技術向上につながっている。 ・農産物の加工については、消費者からのニーズ、期待が大きいものであり、ニーズの高い品目が移り変わる中、テコ入れに取り組んでいくのは意義のある活動である。
②提案・意見
・加工品のニーズは生産者、消費者共に高いがなかなか形にならず、継続しない。 ・加工原料が不作により確保出来ない場合の対処方法を考え、準備が必要である。 ・売れる商品になるまで時間も体力も使うので長期間の伴走をお願いしたい。 ・地域で受け継がれてきた農産物の加工技術や食文化を支えてきた小規模な加工場の存続、女性活躍につながる活動であり、今後も継続した支援お願いする。 ・販路や販売支援で目標売上110%としたところ、成果平均76%というのは、なかなか難しい問題であることを実感した。今後の支援では、この経験を是非生かしてほしい。 ・キャッチコピーやパッケージなど、見える要素へのアプローチも重要である。
③意見を受けての改善点
・農産加工に興味があるものの、施設や設備整備に初期投資がかかることや労働力不足により実現のハードルが高いケースもある。このため、委託加工や簡易な加工から始めてみる等、農業者の意向と状況に合わせ、無理のない起業を支援していく。また、研修や個別指導を通して加工技術や知識の習得支援をし、さらには商品開発から販売までトータルで支援を行うことで商品の定着と売上アップを目指す。 ・原料の不作による売上低下を抑えるための１つとして、商品アイテム数を増やし、１つの商品の売上が落ち込んだとしても、他の原料を使った商品で売上をカバーできるような対策が必要である。そのために新商品開発支援に力を入れていく。 ・次年度からの計画では①新規起業支援、②新商品開発、③販売力強化の３本柱で長期的に伴走支援する体制を整え、対象者の段階的なステップアップを継続的に支援していく。

・毎年１回伝統加工品の加工技術研修会の開催を継続し、ベテラン加工実践者と加工志向者のマッチングを支援する。研修会開催後も加工志向者が加工事業を開始できるまで伴走支援を行っていく。
・これまでの経験をもとに、売上が向上した・低下した理由をより明確に整理し、それに基づく新商品開発や販売力強化の段階的支援を充実させ、効果の見える伴走支援につなげていく。

（７）稲ＳＧＳ新規生産組織の生産技術支援による構築連携の推進　　【Ａ：６名】

①評価点

・一度事業からの撤退があった稲ＳＧＳ生産で、新たな生産組織を作り、施設整備も含めて事業化し、生産までこぎつけた素晴らしい成果である
・それぞれの組織で意向が違う中、調整役として普及課の役割が大きかった。利害関係者の交通整理役という普及ならではの活動だと感じる。
・関係者の調整から施設の製造設計、計画と実務の進捗管理、新しい社員の技術習得までのＯＪＴ指導。ゼロからの立ち上げは普及センターの熱意と相当の苦労の賜物である。成功の秘訣は、関係者全員のビジョンが具体的になっていること。ビジョンまでのプロセスを計画と管理ができたこと、普及課が関係者を調整したことで、今後の活動のモデルになる取り組みである。
・畜産農家は飼料価格の高騰に苦しんでいると聞いている。稲 SGS の取り組みが畜産農家・稲作農家両方のメリットとなるのであればとてもよい。
・実際に現場から相談のあった課題に対して、企業と伴走しながら解決に向けて動いていくというのは、現場に寄り添ったサポートの“あるべき姿”と感じる。

②提案・意見

・稲作では、昔からの課題に加え、近年の価格高騰など不安定な状況が続いており、状況の変化に応じた、きめ細かな対応が継続して必要なのではないか。
・補助金や交付金の制度にどう対応していくかが大切になってくる。関係機関と協力しながら活動を続けて欲しい。

③意見を受けての改善点

・主食用米の動向に加え、飼料用米にかかる交付金施策においてもこれから大きな転換が予想される。そのような中でも稲作農家と畜産農家がお互いにメリットある取組みとして事業継続していけるよう、関係機関と連携し情報収集を行いながら、引き続きサポートしていく。

（８）気候変動に対応した「つや姫」の高品質・良食味米の安定生産

【Ａ：４名、Ｂ：２名】

①評価点
・ラインやチラシによる情報発信を見てもらえる工夫で生産者の意識を高め、高温を対策技術の実施率を向上させるなど成果を出している。 ・近年の高温に対する情報や対策の共有、基礎的なことの徹底という地道な取り組みは意味の大きいものである。
②提案・意見
・つや姫のタンパク質を下げ、収量もとる技術を確立、周知することが求められる。管理作業だけでなく、資材使用の効果も検証してほしい。 ・各 JA との連携や普及課での情報発信体制が確立し、今後もより多くの生産者へタイムリーな情報が届くよう、引き続き取り組んでほしい。 ・活動成果は、気候の成果なのかプロジェクトの成果なのかが分かりにくい。指導対象と地域全体の比較など、年次比較だけでない成果の出し方を検討してほしい。 ・ラインは高齢の農業者にも広まっている有効な伝達手段であり、今後、さらに双方向のコミュニケ―ンツールになるように工夫してほしい。
③意見を受けての改善点
・食味と収量が反比例してしまうという感覚がある一方で、穂数を早期に確保し、一次枝梗籾の割合を多くすることにより、精玄米粒数歩合と千粒重を高め、食味（タンパク）と収量の向上を両立できるものと考えている。引き続き、丁寧な生育状況の把握と迅速な技術情報発信を通し、遅れることなく適正な栽培管理を推進し、高い品質・食味を前提とした適正な収量確保ができるよう、次年度の栽培指導にも取り組んでいく。 ・「基本技術の励行」と言われるように、生育状況に合わせた栽培管理の積み重ねが、高い品質・食味と適正な収量確保につながるものと考えている。一方で、様々な生育を促進する資材があることから、試験研究機関と連携し、情報収集と生産者への情報発信に努めていく。

３　総評

①評価点
・全国同じような状況であるが、地球温暖化、担い手不足という避けがたい大きな課題があるが、そこに、正面から避けることなく直接向き合い、かつ現場に密着した課題を設定している。

・稲ＳＧＳの課題のようにコーディネート役は普及だからできる仕事である。普及指導員が140名いるが、前任者からの成果・バトンを受け継いでよい普及活動になっている。

②提案・意見

・新規就農者が普及課と相談しながら品目選定や栽培計画の作成を行っているのを見て、地域農業の振興、発展に果たす普及課の役割が大きいと感じるが、農業者にその役割が伝わっていない。

・最終的には農業者の所得向上が目標であり、規格外りんどうや枝豆で食味が価格に反映されない面で、JA を後押ししながら単価が上がる活動にしてほしい。

・すでにある加工技術の第三者継承は今後大事になる。これから農産加工に挑戦したいという方への支援に加え、農産加工をやめたいがこの技術を引き継いでほしいという方への支援にも取り組んでもらえると、産地の農業の維持発展につながる。

・離農する方もいる中、普及課として意欲のある若い大規模の人を育てるというテーマが多くなることも理解できる。一方で、農業は生涯現役であり、離農者を減らし、いくつになっても変わらずに支援していくことも普及課・JA の大事な役割だと考える。

・これまで JA 等では、量を集めて首都圏に有利に売るために部会や組織づくりを行ってきた。これからの部会は定義が変化し、高齢化していく農業者や直売所に対し、最後まで元気に農業に参加していけるよう支援していくことも部会の意義となる。これからの農業のビジョンにもかかわるが、産地や部会の在り方、限られた若い農業者をどう育てていくかなどを多方面で考え普及活動に盛り込んでほしい。

③意見を受けての改善点

・普及指導活動の成果をまとめた成果事例の周知や普及課だよりの作成、配布をとおして、普及活動を広く一般の方に知ってもらう機会を設けていく。

・普及課題の設定にあたっては、多岐にわたる地域農業の課題から、現場ニーズを的確に捉え、県の戦略・施策、県が定める「協同農業普及事業の実施に関する方針」に沿って設定している。課題や農業者の経営形態が多様化する中、行政機関、試験研究機関、農協等農業振興に関わる関係機関のみならず、食品事業者、流通事業者等も含めた多様な関係者とも連携し、効果的かつ効率的な普及指導活動を実施できるよう取り組んでいく。

・委員の皆様からいただいた貴重な意見を、次年度以降の普及計画に反映していく。